

メッセージアウトライン 出エジプト記19:1~9 「神との契約」

[1]「エジプトの地を出たイスラエルの子らは、第三の新月の日にシナイの荒野に入った」

イスラエル人がエジプトを出発したのは第一の月（アビブの月）の十五日であった。→出12:6, 29~37, 13:4 新月とはその月の第一日目を意味するので、出発の日から数えると第七週目に入ったと考えられる。（当時のイスラエル人は一種の太陰暦を用い、一年を29日の月と30日の月を交互に置く354日とした。1太陽年と比べると11日ほど短く、その差は3年ではぼ一か月に達するのでその差を閏月[うるうづき]として挿入した）

[2]「彼らはレフィディムを旅立って、シナイの荒野に入り、その荒野で宿営した。イスラエルはそこで、山を前に宿営した」

「シナイの荒野」…これはシナイ半島南部のシナイ山のすぐ前にあった荒野である。イスラエルはこの山の前で宿営した。

[3]「モーセが神のみもとに上って行くと、主が山から彼を呼んで言われた。『あなたは、こうヤコブの家に言い、イスラエルの子らに告げよ。』」

モーセはシナイ山の神のみもとに上って行った。これは到着した翌日のことであろう。主は山からモーセを呼んでイスラエルの民に告げるべきことを教える。ここからイスラエルに対する掟と定めが明確に律法という形で与えられていく。今までは神は先祖アブラハムと祝福の契約を結ばれ、それをイサク、ヤコブと更新されてきたが、ここからはイスラエルの民全体と結ぶ契約となる。これは聖書学者の間ではシナイ契約と呼ばれている。

「シナイ山」…標高2285m 今日ではジェベルムーサ（モーセの山）と呼ばれている。草木の生えていない岩山である。

「ヤコブの家」…「イスラエルの子ら」とも言われるが、ヤコブはイスラエル人の先祖ヤコブのことで、様々な人間的弱さを持った面を表すときに用いられる。イスラエル人はつい数か月前までは先祖ヤコブが叔父ラバンのもとで苦労しながら働かなければならなかったのと同じように、エジプトで労苦にあえぎ、卑しめられた状態であった。

そして「イスラエル」とはあのヤボクの渡して神との格闘に勝利した結果与えられた名であって、「神は争われる」あるいは「神の王子」という意味で、これは靈的に高められ、祝福された面を示している。まさにこの時の彼らはヤコブの家であり、イスラエルの子らでもある。すなわち、一面は肉的にもあり、他の面では靈的にもある状態であった。そのような彼らが名実ともに神の民イスラエルとされるために神はここ

で律法を与え、民全体と契約を結ぼうとされるのである。

[4]「あなたがたは、わたしがエジプトにしたこと、また、あなたがたを鷲の翼に乗せて、わたしのもとに連れて来たことを見た。」

「わたしがエジプトにしたこと」…あらゆる災害でエジプトを打ち、イスラエルをエジプトから脱出させたこと。

さらに主なる神はイスラエルの民を「鷲の翼に乗せてわたしのもとに連れて来た」と言われる。これは一つのたとえである。「鷲」は翼の強い、高く速く飛ぶ鳥として聖書にしばしば出て来る。→Ⅱサムエル1:23、詩篇103:5、イザヤ40:31、エゼキエル10:14、17:3 鷲は高い木の上や断崖絶壁などに巣を作る。そして雛が巣を飛び立つ時は母鷲はその下を飛んで、雛が飛行に失敗して下に落下しないように守るといふ。

ここで「あなたがたを鷲の翼に乗せ…」というのは主なる神の力強さと、イスラエルの民に対する愛といつくしみを、力強い鷲にたとえて表現しているのである。さらに「あなたがたは…見た」とは、どのような推論や理屈にも勝って力があることばである。あなたがたイスラエルの民自身が身をもって体験し、実際にその目で主なる神が力強く働いておられるのを見たのである。

主イエス・キリストが十字架につけられて死んで葬られ、三日目に死より復活された後で、実際にイエスを見た弟子たちが語ったことばも同様である。→使徒4:20 「わたしのもとに連れて来た」とはこのシナイ山のこととも思われるが、単なる場所のことではなく、エジプト時代の苦役の中にあつて神のことをほとんど考えられない、覚えのない、そのような環境から身近に神の臨在を感じ、そのいつくしみと恵みを覚える状態に近づけてくださったという意味であろう。

[5]「今、もしあなたがたが確かにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはあらゆる民族の中にあつて、わたしの宝となる。全世界はわたしのものであるから。」

主はイスラエルの民に新しい一つの条件を出される。それは「わたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら」である。彼らの先祖アブラハムも神の声に聞き従い、行き先を知らないで出て行き、豊かな祝福を受ける者となった。→創世記12:1-4

このシナイの地においては「…わたしの契約を守るなら」と言われている。これはイスラエル民族全体が守るべきことなのである。その具体的な教えは20章以下で展開される。

そして神の声に聞き従い、その契約を守るならばどうなるのか。それはイスラエルが世界のあらゆる民族の中にあつて「わたしの宝となる」ということであつた。「宝」とは一般的には金銀財宝などを指すであろうが、イスラエルが「わたしの宝」となるとは神が全世界の国々の中でイスラエルを最も大切な民とするということである。全世界、全宇宙も神が造られたものであり、その支配のもとにあつて、いろいろな時

代にいろいろな国々が興っては倒れるであろうが、神はその国々の中でイスラエルを最も大切なご自分の宝、愛と顧みの対象として扱われるというのである。

[6]「あなたがたは、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。』これが、イスラエルの子らにあなたが語るべきことばである」

「祭司の王国」という表現は聖書中ここだけで用いられている。祭司は神に仕え、奉仕の働きをする。神にいけにえを献げ、神と人との間に立ってとりなしをする。聖く義なる神と罪咎にまみれた俗なる人間との間に立ってとりなしをするのである。

「聖なる国民」とは他の国民とは違って、神のために特別に選ばれた民という意味であり、それは神のみこころを行い、神と交わるためなのである。

これに関連して I ペテロ 2:9 には次のように書かれている。「しかし、あなたがたは選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神のものとされた民です。それは、あなたがたを闇の中から、ご自分の驚くべき光の中に召してくださった方の栄誉を、あなたがたが告げ知らせるためです」

ここでペテロはイスラエル人だけではなく、すべてイエス・キリストを信じて神の民とされた人々に語っているが、出エジプト記のこの箇所においても言わんとすることは同じで、神との契約を守り、神の宝となったイスラエル人が神のために祭司の働きをして、他の国々の民のために神のすばらしいみわざを宣べ伝え、神へと導き、とりなしをする民となるということである。

イスラエルの民がまことに神に聞き従い、神との契約を守るなら、このようなすばらしい祝福と特権が与えられることになるのである。

[7-8]「モーセは行って、民の長老たちを呼び寄せ、主が命じられたこれらのことばをすべて、彼らの前に示した。民はみな口をそろえて答えた。『私たちは主の言われたことをすべて行います。』それでモーセは民のことばを携えて主のもとに帰った」

イスラエルの民の反応は非常に望ましいものであった。すばらしい祝福が用意されているわけであるので、これに反対する理由は何もない。モーセは民からのことばをもって神のもとに戻って行った。

ここから教えられることは、主なる神はその民と契約を結ばれるに当たって、民の同意なしには何事もなされないお方であるということ、良いことであるからと言って一方的に押し付けるようなことはなされないのである。そしてイスラエルの民は「私たちは主の言われたことをすべて行います」と同意したのであった。しかし、彼らは主からの律法のことばをまだ聞いていないので、最終的には律法の与えられた 24:1~11 で行うことになる。

[9]「主はモーセに言われた。『見よ。わたしは濃い雲の中にあつて、あなたに臨む。わたしがあなたに語るとき、民が聞いて、あなたをいつまでも信じるためである。』それからモーセは民のことばを主に告げた」

「濃い雲」は主の臨在を表すものであり、もう一つの役割は民がその目で主を見て死ぬことがないようにするためであった。主は聖なるお方であり、罪ある人間が見ると死ぬ。→創世記32:30, 出33:20, 士師記13:22

主がそのようにしてモーセに語りかけられるのは、民がモーセを真にイスラエルの指導者として立てられていることを納得し信じるようになるためであった。このようにして、いよいよ神とイスラエルの民との契約のために律法が与えられるのであった。

主なる神はこのようにイスラエルを選んで彼らが契約を守るなら、ご自身の宝として、祭司の王国、聖なる国民となると約束されたが、よく考えてみると神が彼らを選ばれたのは何か特別な理由があったからなのだろうか。聖書を読むとそうではないことが分かる。彼らの祖先アブラハムは特別にすぐれていたから選ばれたのか。そうではない。彼はごく普通の人であり、うそをついて妻を非常に危険な目にあわせることもしている。→創世記12:12~13、20章 その子イサクもしかり。→創世記26:1~10 その子ヤコブに至っては兄エサウの長子の権利を横取りし、父もだましてあげくの果ては兄にいのちを狙われ母親の親元まで逃げて行った人物であった。→創世記25、27章

モーセも四十歳の時にエジプト人を殺し、ミディアン地の地へ逃亡した人物である。→出エジプト記2章、使徒7:23~28 しかし、そのモーセを神は出エジプトの指導者としてイスラエルの民の上に立てられたのであった。これらすべてに共通するのは、人間の側には何も神に受け入れられるような善きものはなく、ただ、ただ神の側の一方的な選びによるものだということである。それは人間の側の善行やいさおしによるものではなく、全くの神の恵みなのである。

それゆえこの神の恵みによって救いに選ばれた者は神をほめたたえる者となる。これが礼拝である。イスラエルの民はエジプトでの奴隷状態から神の恵みによって救い出された。そして今、契約が与えられ、名実ともに神の民となろうとしている。この契約を守る時に、そこに豊かな祝福が用意されているのである。

私たちもごく普通の人であり、また弱い者であるが、恵み豊かな神はそのような私たちを選び、救いに定めてくださった。これは一方的な神の恵みである。旧約時代、民はモーセによって与えられた律法を行い、神との契約を守ることによって祝福が与えられたが、今、私たちが生きている新約時代にはこのことが信仰によってなされる。それは神の御子イエス・キリストを信じる信仰によるのである。もはやイスラエル人も異邦人もない。ただ信仰によるのである。

旧約時代は律法によって定められた動物をいけにえとして祭壇にささげることによって人間の罪の贖いがなされたが、今日では動物ではなくもっと完全な神の御子イエス・キリストの十字架の死によって罪が贖われ、信じる者は救いに入れられるのである。

→へブル7:19, 10:1~4、ローマ5:6~8、エペソ1:3~7、Iヨハネ4:9~10

どのような人でもこのイエス・キリストを自分の救い主として信じ受け入れる者は救われ、神の民とされ、神の宝となる。このことを覚え、私たちは心から主を賛美しよう。